

# 要 約

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	新 原 正 大
主 論 文 題 名				
Sentinel lymph node mapping for 385 gastric cancer patients (胃癌患者385例に対するセンチネルリンパ節生検の検討)				
(内容の要旨)				
<p>本研究の目的は、胃癌におけるセンチネルリンパ節 (Sentinel lymph node; SLN) 生検の成績を評価すること、検出不能症例や偽陰性症例に対する予測因子を同定すること、またSLN生検症例に対する長期的な予後を評価することである。</p> <p>対象は、未治療の長径4cm以下、臨床病期cT1N0M0もしくはcT2N0M0胃癌症例で1999年4月から2007年12月までに教室で根治手術を施行した385例である。SLN生検は、ラジオアイソトープ法および色素法を併用で施行した。全例にSLN生検を施行したのちに系統的リンパ節郭清を施行した。</p> <p>全症例に対するSLN検出率は96.6% (372/385) であった。SLN検出可能な症例において、リンパ節転移診断の正診率は98.9% (368/372) であった。さらにcT1症例では99.1% (344/347)、cT2症例では96.0% (24/25) であった。偽陰性症例は4例認めたが、そのうち3例は病理学的にT2以深であった。SLNを含むそのリンパ流域をSLN basinと定義されるが、SLN検出可能症例のうち1例を除くすべての症例でSLN basin内にリンパ節転移が留まっていた。検出不能例もしくは偽陰性症例を予測する因子に関して多変量解析を用いて検討した。因子として、占居部位・長径・深達度・腫瘍分化度・リンパ管浸潤・静脈浸潤・術式 (開腹vs. 腹腔鏡手術) ・性別そして時代背景 (対象期間の前期vs. 後期) を選択し解析した結果、時代背景のみが唯一有意差をもつ予測因子として抽出された。SLN生検の手技の安定やラーニングカーブが関連している可能性が示唆された。長期的な予後の検討であるが、全症例の5年無再発生存割合は96.1%であった。SLN転移陽性症例はSLN転移陰性症例と比較して予後不良であった (99.0% vs. 86.3%; p=0.008)。またSLN転移症例のなかで、SLN以外のリンパ節に転移を認める症例と認めない症例との群間では有意差を認めなかった (p=0.511)。SLN転移陽性であれば系統的リンパ節郭清を施行することが望ましいことが示唆された。</p> <p>これらの結果より長径4cm以下のcT1N0M0胃癌に対するSLN basin郭清を伴うSLN生検は、根治性を担保したリンパ節転移診断の有用な方法と考えられ、今後の縮小手術・低侵襲手術への応用が期待できる。また、SLN生検の手技の安定化が検出不能症例や偽陰性症例を減少させることにつながると考えられた。</p>				